

米軍ヘリ墜落と沖縄の現状

——人権擁護委員会沖縄問題対策部会による沖縄調査



●地元との交流深め、米軍基地問題を考える

2004年11月19日から、毎年恒例の人権擁護委員会沖縄問題対策部会による沖縄調査があった。今回はなんとといっても8月13日に起きた沖縄国際大学構内への米軍ヘリの墜落が大きなポイントであり、調査は、この墜落したヘリが所属する米軍普天間基地のある宜野湾市と墜落現場である沖縄国際大学からの聞き取り、ならびに米軍基地に対する住民訴訟を行なっている原告団の方との交流、それから今回のこの問題を把握する上でも重要な日米地位協定の改定に関する沖縄弁護士会との勉強会であった。

●普天間基地とは…

ご承知のとおり、市街地の真ん中にあり、以前からその危険性が指摘されており、既に1996年に日米でその返還が合意されていた。しかし、日本にある米軍基地の75%が集中するといわれる沖縄の中で、これ以上基地の適地をさがすのは困難をきわめている。

宜野湾市では墜落時に撮影したビデオ映像を見、市長から直接、事件についての経過を聞くことができた。市長自らが

墜落現場に飛んでいったから、その発言にもまた事実の重みがある。大学構内だけでなく、市内のあちこちに墜落した部品の写真や、赤ちゃんのいる部屋を落下した部品が通り抜けていったという民家の人の話など、思わず「奇跡」としかいいようのない生々しい証言があった。

ビデオには米軍兵士が周辺を固めて、市長や市職員、大学関係者はもちろん警察が現場検証さえできない状況が映し出され、思わずこれが日本の国の中の出来事なのかと目を疑う映像もはっきり出てくる。当初は現に存在する「危険」回避のため検証は後にするよう制止されたのであるが、実際のところはそれは嘘で、当初から日本の警察には捜査させないつもりであったとしか思えない。

●大学の自治なんて問題ではない？

沖縄国際大学ではやはり学校関係者が撮影したビデオ映像を見、その構内ならびに屋上と墜落現場の見学をしたが、米軍はまだ墜落する前に基地フェンスを乗り越えて直接構内に侵入してきたのだという。つまり、墜落前からその危険を察知して先回りして事故現場に入り、周りを封鎖したのである（消防活動だけは日本の消防隊に行なわせているが）。屋上から見ると、基地フェンスと道路1本はさんで大学構内なのである。

そして、なんといっても墜落したヘリコプターが炎上した現場は、写真のように焼けこげた樹木が、ローターで削られ黒煙が張り付いているその壁面を指さして、沖縄のおかれていた状況を告発しているようにさえ見える。この現場を保存するか否か現地では議論になっているという。部外者としては事件を忘れないためにも保存してほしいと思うが、事件がトラウマになっている市民もあると聞く。

本土にいる私たちは、ともしれば沖縄のこのような現状を忘れそうになるが、是非、東弁でもこのビデオの上映会を行ない、会員の多くに米軍基地を抱えるということはどういうことなのか、現状を知ってもらえるような機会を作してほしいと思う。

(人権擁護委員会沖縄問題対策部会 大山 美智子)